

日蓮聖人における積尊観

菊 田 俊 淨

はじめに

積尊は、何を求めて出家されたのであろうか。そして、法華經を通して何を語ろうとされたのであろうか。また、積尊が娑婆世界に存在された事実が、自己にとってどのような意義があるのだろうか。このような思いを懐きながら、日蓮聖人の遺文を繙くと、そこには、滅後長年月を経ているにも関わらず、今も生きて我々を教導してくださっている積尊の姿が、いきいきと描きだされていることを知るのである。

日蓮聖人は、子が親を慕うように積尊を慕われ、積尊によって生かされ、共に生きているという実存感を、遺文の全篇にわたって述べられているといっても過言ではない。そして、積尊の真の教えを素直に受け入れることによって、積尊の本懐である法華經を依經とする教学、すなわち末法衆生救済の論理を展開し、教学思想の体系化がなされていたと思われる。

ここで問題となるのは、日蓮聖人の信仰の対象として描かれた積尊が、自己にとって如何なる意味をもち、宗教的実存の場に、如何に深く関わっているか。換言すれば、我々の信仰の対象が、阿弥陀仏や大日如来ではなく、久遠成道の本仏積尊でなければならぬ必然性は、如何なる理由からなのかということである。

この問題はとりも直さず、宗教的にあらねばならない自己の存在のあり方とも、深い関わりを持つものであることは論ずるまでもない。つまり、宗教的に尊崇する対象を明らかにすることは、それを絶対依拠とする自己が、この世に生を受けた意義をどこに見出せばよいのか。さらに、現実社会との関わりのおうえでどのように生きなければならぬのかという問題と、切り離すことができないのである。

すなわち、信仰の対象を定めることは、その絶対者の世界に自己が絶対随順し、この歴史的現実を、その絶対者の誓願、あるいは勅命のままに生きなければならないことを意味している。

現実社会において、人々は様々な苦難に出会うが、そこから逃げ出すことはできない。なぜなら、この娑婆世界こそ積尊の浄土であり、救いの場（浄土）という空間だからである。

このように考えてくると、日蓮聖人の帰依された積尊の仏格は、自己にとって遙か彼方の存在ではなく、まさに今を生きるうえでの必然的な関わりをもつ存在であり、偉大な存在であることが確認できる。しかも、日蓮聖人が仏使自覚をもたれ、末法の導師として生きる責任を全うされたことは、まさしく積尊の衆生救済という誓願の継承であり、積尊の勅命に全身全霊をかけて帰依をされた姿であると理解できるのである。ここに、積尊の大慈悲に支えられた日蓮聖人の、深い慈悲者としての姿が浮かび上ってくる。

では、日蓮聖人は如何なる積尊を具体的に描かれているのであろうか。その積尊観を、外郭的な面ではあるが少しく考察してみたい。

日蓮聖人における釈尊觀の根幹が、奈辺に存するかという問題は、先学によって既に様々な視点よりの考察がなされている。¹⁾

それらの研究によって理解できることは、「如来壽量品」における

然善男子。我実成仏已来。無量無辺百千万億那由佉劫。²⁾

の文を依拠とする発迹顯本を契機とした、久遠開頭がその綱格をなすものであるということである。「開目抄」には、

然善男子我実成仏シテヨリ已来無量無辺百千万億那由佉劫等云。此の文は華嚴經の三処の始成正覚、阿含經云、

初成淨名經の始坐仏樹 大集經云、始十六年 大日經、我昔坐道場等 仁王經、二十九年 無量義經、我先道場

法華經の方便品云、我始坐道場等を、一言に大虚妄なりとやぶるもん(文)なり。此過去常顯時 諸仏皆釈

尊の分身なり。——中略——今爾前迹門にして十方を淨土とがう(号)して、此土を穢土ととかれしを打かへして、

此土は本土となり、十方淨土は垂迹の穢土となる。仏、久遠の仏なれば迹化他方の大菩薩も教主釈尊の御弟子なり。³⁾

とて、久遠実成の釈尊が三世常住の仏であり、諸仏を能統一する教主であることを端的に説かれている。さらに『観心本尊抄』にいたっては、

壽量品云、然我実成仏已来無量無辺百千万億那由他劫等云。我等己心、釈尊、五百塵点乃至所顯、三身ニシテ無始、古仏也。⁴⁾

と、凡心所具仏界の世界をいだされ、久遠実成三身円満の古仏、すなわち五百塵点劫已前の無始久遠の仏であるという、日蓮聖人の釈尊觀の一端が確認できる。このことを大前提として、釈尊の説示についてみると、主師親三徳具備の超勝性ということに着目が必要かと思われる。

この主師親三徳義は『開目抄』の冒頭に

夫一切衆生の尊敬すべき者三あり。所謂主・師・親これなり。

と、その倫理的観念が示されている。

『下山御消息』には、

法華經の第二卷に主と親と師との三大事を説給へり。一經の肝心ぞかし。其經文云、今此三界皆是我有。其中衆生悉是吾子。而今此處多諸患難。唯我一人能為救護等云。

とて、主師親三徳義が一經の肝心であるとまで述べられるものである。

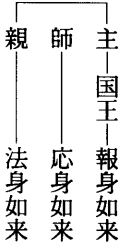
この「譬喩品」の文を依拠とするところの主師親三徳義は、『南条兵衛七郎殿御書』においてもみられるもので、釈迦如来は此等衆生には親也、師也、主也。

といわれ、

ひとり三徳をかねて恩ふかき仏は釈迦一仏にかぎりたてまつる。

として、主師親三徳をそなえているのは、釈尊のみであるとされるのである。

とくに『八宗違目抄』においては、「譬喩品」の文を三徳に配し、「今此三界皆是我有」には主・国王・世尊、「其中衆生悉是吾子」には親・父、「而今此處多諸患難唯我一人」には導師と明記され、ついで、



と、仏の三身と三徳を相對して、図化されているのである。

ここで注目されることは、「如来寿量品」の偈文である「我亦為世父」の文が記されていることである。このことより、日蓮聖人は主師親の三徳義のうち、とくに親の徳、すなわち父の徳を重視されていたのではないかと思われる。それは次下に、妙樂大師の『五百問論』の一節、

若レ不知^シ父、寿之遠^ク復迷^フ父統之邦^ニ 徒^ラ謂^フ才能^ト全非^ス人子^ニ。又云^ク 但恐^{クハ}才当^{ルトモ}一國^ニ不^レ識^ス父母之年^一。^①

ならびに、道宣の『古今仏道論衡』の

三皇已前^ニ未^レ有^ス文字^ニ但識^ス其母^ニ不^レ識^ス其父^ニ同^ニ於禽獸^一。^②

という文を引用されていることによっても明らかである。

すなわち『五百問論』における意は、父（釈尊）の寿命の長遠なることを知らないような者は、その父の統治する国にも迷う者であり、そのような者はいかに世智才能があってもまったく人の子ではなく畜生と同じであり、またその才智が一國全体の人に匹敵するほどであっても、自分の父母の年を知らないような者は恥知らずであるとして、天台法華宗以外を破折するのである。

さらに、法華宗以外の八宗は釈尊をもって眞の父とすることを知らないもので、三皇（中国上代の伏羲・神農・黄帝）以前の人々が、母を知ってはいるが父を知らずに、禽獸に等しかったようなもので、寿量の釈尊を尊崇しないことは、畜獸と同じであるとの『古今仏道論衡』の文に依っているのである。

これらの論疏の引用より、父徳の強調があることが頷ける。このように、久遠成道の釈尊の仏格に「父」という実感的概念をいだかれていることは、『開目抄』における他宗の本尊を破する文にも明らかである。

而^レを天台宗より外の諸宗は本尊にまごえり。——中略——例せば三皇已前に父をしらず、人皆禽獸に同ぜしがごと

日蓮聖人における積尊観

し。寿量品をしらざる諸宗の者、畜同。不知恩の者なり。故、妙樂云、一代教、中未下曾、顯も遠ニ父母之寿。若し。知ニ父、寿之遠ニ復迷ニ父統之邦。徒謂ニ才能ニ全非ニ人子ニ等云。妙樂大師は唐の末天宝年中の者也。三論・華嚴・法相・真言等の諸宗、並に依経を深み、広、勘て、寿量品の仏をしらざる者、父統の邦に迷る才、能ある畜生とかけるなり。徒謂才能とは華嚴宗、法藏・澄観、乃至真言宗の善無畏三藏等は才能の人師、子の父をしらざるがごとし。

すなわち、妙樂大師は諸宗の經文および法華經を深く考えた結果、寿量品にあらわされた久遠の仏を知らない諸宗の学者は、父の治める国を知らないものであり、才能には長じていたが、子が父を知らないのと同様であると破折されたのである。

このように、日蓮聖人は積尊が娑婆世界を統治する教主であり、我々衆生にとっては父であるということに重きを置かれていたことが看取できる。

門祖日隆聖人は、三徳具備の積尊について『私新抄』に、

此、娑婆惡世ノ父母ハ教主積尊ナルベシ。積尊、慈悲勝ニ諸仏ニ深重ナレバ此、穢土惡世ノ群類ノ諸仏ノ悲願ニ漏レタル衆生ヲ積尊一仏シテ救玉フ事誠ニ希有ナル者也。十方淨土擯出衆生ト説テ、十方淨土ヨリ追出レタル惡人此娑婆界ニ住セリ。此ヲ積尊一仏、利レ之、玉ヘリ。唯我一人能為救護ノ説銘、肝難シ有者也。高祖ニ云、釈迦仏ハ我等カ為ニハ主也師也親也一人シテ救護スト説玉ヘリト積玉ヘル此意也。

と説かれ、さらには、

積尊、三世常恒、娑婆世界、為ニ我等、唯我一人能為救護之本仏也。一谷御抄ニ云、娑婆世界ハ五百塵点劫ヨリ已來教主積尊ノ御所領也。一切衆生ハ積尊ノ御子也。一切衆生ノ親也。又此國、為ニ一切衆生、教主積尊ハ明師也ト

判ジ玉ヘリ。此、為ニ娑婆世界、衆生、教主釈尊、主師親三徳有縁ノ本仏也。¹⁶⁾
とて、教主釈尊が主師親三徳具備であり、娑婆世界の教主であるという認識を、日蓮聖人遺文における説示からもたれ、継承されていることが確認できる。

二一

日蓮聖人は、釈尊の仏格に「父」の概念をもたれていたことに関連し、法華經に説かれる「種」の理念に言及され、『開目抄』に説示される。

伝教大師は日本顕密の元祖、秀句ニ云、他宗所依經、雖有ニ一分仏母義、然、但有レ愛、闕ニ嚴義。天台法華宗、具ニ嚴愛義。一切賢聖學無學及發ニ菩薩心一者之父、等云。真言・華嚴等の經經には種熟脱の三義名、字、猶なし。何況其義をや。¹⁶⁾

すなわち、伝教大師の『法華秀句』¹⁷⁾によれば、天台法華宗以外の諸宗の依經には、実相の理を説いているため、仏を生む義はあるがそれは母の愛のみであり、法華經に説かれるような下種を示さないため、父の嚴の義が欠けており、父母嚴愛の義をそなえて一切の二乗や菩薩の親としての資格のあるのは、法華經における釈尊のみであるというのである。

この嚴愛の二義について、日蓮聖人は『法華宗本門弘經抄』に、
觀心抄に無量義經を引て云く、譬如下國王、(人・父) 夫人(法・母) 新生ニ王子ニ乃至善男子是、持經者亦復如レ是、諸仏、國王(父) 是經、(実相) 夫人(母) 和合、共生中、是、菩薩、子、文、開目抄に秀句を引て云く

他宗所依^レ經^ハ一分雖^レ有^ニ仏母^ヲ義然^シ但^モ有^テ愛^ム(母)闕^ク嚴^ク(父)義^ハ天台法華宗^ハ具^ス嚴愛^シ義^ハ一切^ノ賢聖學無學及^テ發^ス善薩心^ヲ者^ノ之^ヲ父^{ナリ}等文云ふ所の他宗所依の經とは爾前諸經並に迹門なり。仏母とは爾前迹門の開未開の円理実相なり。愛とは実相の母なり。嚴とは久遠の父なり。天台法華宗とは本門なり。嚴とは本因本果の父のことなり。愛とは本因本果所顕所覺の実相法身なり。一切賢聖とは九界なり。父とは本因本果の釈尊上行なり^云。と説示される。ここに引用される『無量義經』第四不思議力の文や、嚴愛の二義という概念は、衆生が成仏するためとされる子であり、教主釈尊は末法衆生に対して、妙法五字を下種するという能動性をもたれ、仏種を衆生に植えることによつて救済されようとするのが、教主釈尊の誓願であると信解できるからである。

すなわち、仏種子である一念三千を顕わさんとして『観心本尊抄』には『無量義經』の、国王と国王の夫人と和合して子を生ずるといふ譬喩をあげ、『開目抄』には『法華秀句』の天台法華宗は嚴愛の二義を具足するという文を出されたといふのである。

つまり、ここでいわれる国王の父・嚴といわれるのは久遠成道の報身を譬え、国王の夫人・愛といふのは理境三千の実相を譬え、父(仏)母(実相)和合して生ずる子供を、事具三千の仏種を具足せる我等一切衆生に譬えられたと信解できる²⁰。

株橋日涌先生はこの釈尊について、「この本仏釈尊は、一念三千を証得せる境智冥合の仏にして、その所証の三千を仏種子として我等衆生の心に具足莊嚴された」となし、「本仏釈尊は、我等衆生の為には親父にましますのである」と述べられている²¹。

ところで、一致派の学匠である行学院日朝上人(一四二二—一五〇〇)は『開目抄私見聞』第四において、嚴愛の

二義を次のように解説している。

私云開經ニハ夫人ト説玉ヘリ。是愛義ナルベシ。合經ニハ父ト宣玉ヘリ。是即嚴義歟。サレバ山家得此等經說意具嚴積玉歟。能可尋之。尋云一分父母義云。如何様事耶。答諸部円教所明実相理云歟。凡諸部円從実相妙理出生法談故、諸仏ノ能生ナル義一分明之、故指レ之、一分仏母義ト申歟。尋云嚴義者如何。孝經註云、母至親而不尊、君至尊而不親、唯父兼尊親之義焉。すなわち、爾前經においては実相の妙理より法を出生する故に一分父母の義といい、それは愛の義であるという。

また嚴の義については、『孝經』の文を依拠とされている。この『孝經』は日蓮聖人が、「此の經は内典の孝經なり」「孝經と申に二あり。一には外典の孔子と申せし聖人の書に孝經あり。二には内典。今の法華經是也。内外異なるれども其意は是同じ」等と説示されるもので、孔子が門人の曾子を相手として、孝が徳（人間の本性）のもとであり教えのよって出ざる所であることを説いた書であるとされる。

『録内啓蒙』においても『孝經』の文を引用し、嚴の義について解説している。

子曰、資於事父以事母、其愛同。故資於事父以事君、其敬同。故母取其愛、而君取其敬。兼之者父也。

つまり、父に事えるそのままの態度で母に事えるならば、それが取りも直さず母に事える愛そのものである。また、父に事えるそのままの態度で人君に事えるならば、それが人君に事える敬そのものとなる。だから、母には父に事えるその愛を取って事え、君には父に事える敬を取って事える。母に事える愛と、君に事える敬と、この両者を兼ね備えることのできるのは父であるというのである。ゆえに、「孝、莫大於嚴父。嚴父莫大於配天」とあるように、孝行と言われる中で、父を尊ぶことより大事なものはなく、父を尊ぶことの中で、父を天と並んで合わせ祭るよ

り大事なことはないというのである。

つまり、敵の義には「たつとい」「たつとぶ」という意の他に、「おそれる」という意味もあり、それが古来より父を敬う義に通ずると解釈されてきたのではないかと思われる。

さらに『録内啓蒙』では次下に、

父母を敵愛の一に分つ時は愛は母の徳、敵は父の徳也。敵は敵慄の義歟。父は敵慄なれば子畏れ敬なり。母は慈愛ふかければ子したしむ也。諸経には仏母の真相を明せば愛の義一分あるなり。三五の種子を明さざれば敵父の義闕たり。種子は父方につくもの也。

と示され、三五下種を明さない諸経においては敵の義が欠けているというのであり、ここに種を植えるという観点より、父の徳の強調されるゆえんが存するのであろう。

三三

ところで、釈尊が娑婆世界の教主であり、父であるということに関連し、注目されることとして、『法華取要抄』³¹⁾『二代五時鷄図』³²⁾『定本注法華経』³³⁾等に引用のみられる『法華文句』釈信解品³⁴⁾の文、

舊以西方無量寿仏以合長者。今不用之。西方仏別縁異。仏別故隱顯義不成。縁異故父子義不成。³⁴⁾
ならびに『法華文句記』の

西方等者。弥陀釈迦二仏既殊。一中略一況宿昔縁別化道不同。結縁如生成熟如養。生養縁異父子不成。³⁵⁾
の文がある。これは、光宅寺法雲の『法華義記』における、

今此経言法身者指他方応身為法身。故如仏在無量寿国此間衆生機感無量寿来応仍名無量寿仏為法身也。³⁶
の文の義を破したものである。

すなわち、天台以前においては、長者窮子喩において、長者の珍衣を服すを法身・弥陀となし、垢衣を著するを応身・釈迦と解釈されてきた。つまり、長者は無量寿仏（阿弥陀仏）であるとされてきたが、阿弥陀仏は西方浄土の仏であって、娑婆世界とは無縁の仏であるから、父子の義は成じないという解釈である。この阿弥陀仏について日蓮聖人は『一谷入道御書』に

娑婆世界は五百塵点劫より已来教主釈尊の御所領也。大地・虚空・山海・草木一分も他仏の有ならず。又一切衆生は釈尊の御子也。——中略——阿弥陀仏は十萬億のあなたに有て、此娑婆世界には一分も縁なし。なにと云とも故もなき也。³⁷

と、娑婆世界に無縁の仏であると厳しく論断され、それに関連して『浄蓮房御書』に

阿弥陀仏等の諸仏我と娑婆世界を捨しかば、教主釈尊唯我一人と誓て、すでに娑婆世界に出給ぬる上は、なにをか疑候べき。³⁸

と述べられ、さらに『頼基陳状』では、

教主釈尊は日本国は一切衆生の父母也、師匠也、主君也。阿弥陀仏は此の三の義まします。³⁹

とて、阿弥陀仏には主師親三徳義が備わっていないとされ、徹底して阿弥陀仏を批難され、釈尊の超勝性を顯示されるのである。

日蓮聖人は『法華文句』『法華文句記』の文を受けて『私新抄』に、

釈尊、娑婆世界、教主也ト頭レ玉ヘリ、是皆外用隨縁之日如此示現シ玉フ者也。西方、弥陀ハ西方ノ衆生ノ父母

也。大通十六王子ノ因縁ヲ以テ思^レ之^ハ、八方作仏ノ時ノ弥陀ハ西方浄土ノ衆生ニ結縁シ起^シ四十八願^ヲ住^ニ彼^ニ土^ニ疏^六云、舊以^ニ西方^ノ無量寿仏^ヲ以^テ合^ス長者^一今不^レ用^レ之^ヲ、西方仏別縁異、仏別^ノ故^ニ隱顯、義不^レ成^セ、縁異^{ナル}故^ニ父子^ノ義不^レ成^ト云^{ヘリ}、記^六受^レ之^ヲ、弥陀釈迦ニ仏既殊、宿昔縁別^ニ化道不^レ同^ル、結縁^ハ如^ク生^ク成熟^ハ如^ク養^フ生^ヤ、縁異^{ナリ}父子不^レ成^ト云^{ヘリ}、本末^ノ積義分明也。西方弥陀^ハ非^ニ此娑婆^ノ衆生^ノ父母^ニ生^ヤ、縁無^シ之^ヲ以^テ何^ヲ今時信^レ之^ヲ。此界^ノ慈父^ハ但^ハ釈迦^一仏也。一^ハ仏^ヲ以^テ遍作^ス法界^ノ衆生^ヲ利益^シ玉^{ヘリ}。經云、今此三界皆是我有、其中衆生悉是吾子、唯我一人能為救護、一切衆生皆是吾子ト云^{ヘリ}。

と述べられるが、阿弥陀仏に關しても、此の娑婆に無縁の仏であるとする日蓮聖人の意を、忠実に踏襲されたものであることが、この一文においても窮うことができるのである。

むすびにかえて

以上、非才浅学をかえりみず、日蓮聖人の積尊観について少しく考察してみたが、常識の確認、資料の羅列のみに終始し、概略的な事項にしかふれえなかつた感否めない。

今後は、鎌倉・室町期の人々がどのように宗教的絶対者である仏を定義づけていたのか。また、浄土観の問題、本尊論に關する問題とも重ね合わせ下種の教主である積尊について考察を進めていきたいと思う。

尚、稚拙な論稿に關わらず、発表の機会を持たせていただいたことに、深く感謝する次第である。

註

(1) 望月欽厚稿「日蓮聖人の仏陀観」(『大崎学報』第五九号所収)・渡辺宝陽稿「日蓮聖人の積尊観」(茂田井先生古稀記念論

文集『日蓮教学の諸問題』所収・北川前肇著『日蓮教学研究』第三章等に詳細な釈尊觀研究がなされている。

- (2) 岩波文庫『法華經』下卷一二頁
- (3) 『昭和定本日蓮聖人遺文』(以下『定本遺文』と略称) 五七六頁
- (4) 『定本遺文』七一二頁
- (5) 『定本遺文』五三五頁
- (6) 『定本遺文』一三四〇頁
- (7) 『定本遺文』三二〇頁
- (8) 右同
- (9) 『定本遺文』五二五頁
- (10) 『定本遺文』五二六頁
- (11) 『統藏經』二・五・四下卷第六丁ヲ
『定本注法華經』下卷四一二頁
- (12) 『大正新修大藏經』(以下『大正藏經』と略称) 第五二卷三七四頁c
- (13) 『定本遺文』五七八―九頁
- (14) 『日蓮宗宗学全書』(以下『宗学全書』と略称) 第八卷三一四頁
- (15) 『宗学全書』第八卷五一―六頁
- (16) 『定本遺文』五七九頁
- (17) 『伝教大師全集』第三卷二五七頁
- (18) 『法華宗本門弘經抄』第二卷四〇九―一〇頁
- (19) 『真訓両読法華經並開結』三六一―八頁
- (20) 常住院日忠上人(一四三八―一五〇三)は『観心本尊抄見聞』(『宗学全書』第九卷九三頁)に、「法華ハ三世諸仏ノ所証、境、十方三世ノ諸仏ハ能証、智也。此境智冥合シテ菩薩、子生、之。其、菩薩ノ子、者法華持經、人也。是以、譬、顯、之、時、諸仏ヲバ國王ニ譬へ、此經ヲバ夫人ニ譬ル也。」と説示されている。

日蓮聖人における釈尊觀

日蓮聖人における釈尊観

- (21) 『開目抄十講』八七頁（『桂林学叢』第十三号所収）
- (22) 『宗学全書』第十五卷三二〇頁
- (23) 『開目抄』（『定本遺文』五九〇頁）
- (24) 『法蓮抄』（『定本遺文』九四三頁）
- (25) 『新釈漢文大系・孝経』（明治書院）二一三頁
上卷三四〇―三四一頁
- (26) 『新釈漢文大系・孝経』一三五―四〇頁
右同書一三三頁
- (27) 諸橋轍次著『大漢和辞典』第二卷一七四頁参照
上卷三四一頁
- (28) 『定本遺文』八二二頁
- (29) 『定本遺文』二三三九頁
- (30) 『定本遺文』一〇七六頁
- (31) 『大正藏經』第三四卷八〇頁b
- (32) 『大正藏經』第三四卷二七六頁a
- (33) 『大正藏經』第三三卷六三五頁c
- (34) 『定本遺文』九九二―三頁
- (35) 『定本遺文』一〇七六頁
- (36) 『定本遺文』一三五七頁
- (37) 『宗学全書』第八卷二一三頁
- (38) 日蓮聖人の釈尊観については、自己の信仰という面からも、今後の研究課題としていきたい。